〔科目名〕	〔単位数〕	〔科目区分〕
学 習 導 入 演 習	2 単位	アカデミック コモンベーシックス

〔担当者〕	〔オフィス・アワー〕
横 手 一 彦 YOKOTE　Kazuhiko	**時間** ： 開講時に提示する **場所** ： 横手研究室(616 号室)

〔科目の概要〕

大学で〈学ぶ〉ということは、どういうことなのだろう。高校までの勉強と、どこまでが同じで、どこからが違うのだろう。大学一年、入学した春学期の、そのような戸惑いは当然のことである。また、自然なことでもある。

この科目は、これまでの「学習」という土台の上に、大学における〈学ぶ〉筋道を示すような形で、疑問や不安に応えるようとする科目である。新しい学問領域と接点を持ち、交差するではなく、〈学ぶ〉ということに対した応答が目的の一つである。そのため、入門的な内容になる。

ひとり一人が、今後の四年間をみすえ、その初年度の春学期に、〈学ぶ〉という自覚と、〈学ぶ〉という姿勢を自らに引き寄せる。教員の立ち位置は、それらを側面的に支援するところにある。教員は、側面的であるという以上に、学生の側に進むことは出来ない。

〈学ぶ〉ことは、〈勉強する〉こととは、やはり違う。その違いを、最も大切したい。

加えて、自分の文章を書く、自分の論文(レポート)を書くという方向へと段階的に進める。

〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕

気づかなかったことに気付く。知らなかったことを知る。それらは、単純なことのようで、それほど簡単ではなく、深い意味を持っている。その底は、自らの意欲に関わる。

自分が〈学ぶ〉という一面に、自分以外の人から〈学ぶ〉という側面を重ねることで、これまでの自分の行為に自覚的になる。これは大切な点であり、それに正面から向き合おうとすれば、相手(他者)は、意外なほどに手強いし、また凄い存在でもある。近未来的な自分のために、安易な自己満足は許されない。

これまでと、いまに立ち返り、もう一度見つめ直せば、必ずしも十分ではなかったと気づく。この隙間(すきま)を埋める。「自分が」「自分で」「自分の」、である。誰かは手助けしてくれるが、その代理や代弁を務めることはない。

大学で〈学ぶ〉というプロセスは、約(つづ)めれば、物や事や人や考え方や情報などに向き合い、そこから特定の事柄を対象化し、その関わりに自らの課題を発見する。そして、分類し、分析し、考察を深め、独自に調査し、議論を重ね、さらに論究を続ける。そのような、連続する流れとしてある。その成果の多くは、論文(レポート)の形にまとめられる。

それらを、意図的に、段階的に、踏み上がる。教員は、その手助けをする。自らが〈学ぶ〉自覚と、自らが〈学ぶ〉姿勢を具体的に引き寄せる。それらが、大学という場で〈学ぶ〉基礎をつくりあげる。

これからに対し、「自分」が「自分」を励ます以外に手立てはない。苦労して書き上げたレポートに、自分を励ます力が宿る。〈学ぶ〉階梯から体得した方法論は、大学四年間を〈学ぶ〉要になる。

〔科目の到達目標（最終目標・中間目標)〕

〔中間目標〕

幾つか問題について意見を交換し、相互の理解を深める。それらを文字化して表現する。

1. 方法的接近(本という形態・基礎的な理解・幾つかの簡素な論理・古い図書館・外国の図書館・今の図書館)
2. 方法的接近の具体例(級友・図書館文献・文献検索・ネット情報)
3. 口頭発表(本に学ぶ)

〔最終目標〕

自分が、〈学ぶ〉主体であると改めて気付き、実感的に知り、実践を重ねる。小レポートや課題レポートの作成を通じ、自らが〈学ぶ〉ことに対し、自覚的に、意欲的になる。それを最終目標とする。

1. 過去の実践例に学ぶ(批判的な論究)
2. 現在の課題意識、関連資料の収集と整理、分析的思考と論理に基づいた構想力。それらの文字化(レポート作成)。

〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕

1. 教壇に立つ側が饒舌に過ぎる場合がある。それを自戒し、教場における学ぶ主体は、学生であると自重する。
2. 教員の用意する話題が、脈絡に欠けると受け取られた時があった。一部の話題を組み立て直し、流れのある展開となることを心掛ける。他方に教材開発に努め、多種、多様であるという側面を維持する。
3. レポートの書き方について、事例を紹介し、その実践を求める。

〔教科書〕
なし

〔指定図書〕
なし。

〔参考書〕
佐藤望編著『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』第２版(2016、慶應義塾大学出版会)など

〔前提科目〕
　な し。

〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)

教場における積極的な姿勢や課題解決への意欲など２割、口頭発表１割、小レポート２割、課題レポート５割。

〔評価の基準及びスケール〕

A：100 点～80 点
B：79 点～70 点
C：69 点～60 点
D：59 点～50 点
F：49 点～0 点

〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕

自らが学ぶという意欲。
級友と学び、級友が学ぶ姿勢への共感。
レポートという表現行為への深い関わり。

授業スケジュール

第１回	テーマ(何を学ぶか)：科目導入の初期段階への接近 内　容：1.大学というところ　2.大学生ということ 3.自分が学ぶ　4.高校生と大学生　5.中学生と高校生と大学生 教科書･指定図書　なし　以下同じ
第２回	テーマ(何を学ぶか)：教員による科目内容の方向付け 内　容：1. 各自の事前学習　2. 大学図書館というところ　3. 図書館図書の選定(新書版程度) 4. 口頭発表(本に学ぶ 5 分程度 3 人)　5. 例.西行 桜　6. 例.広瀬淡窓 教科書･指定図書
第３回	テーマ(何を学ぶか)：これまで自分　今の自分　これからの自分 内　容：1.自分の過不足　2.いまの自分に必要なこと 3.方向性・構想・具体的な展開　4. 考えるということ 教科書･指定図書
第４回	テーマ(何を学ぶか)：多様な知 1――教科書と教科書以外に学ぶ 1 内　容：1. 科学的思考　2. 大学という教育機関 3. 他人が組み立てた思考方法を学ぶ　4. 自分と自分以外との関わり　5. 研究ということ 教科書･指定図書
第５回	テーマ(何を学ぶか)：多様な知 2――教科書と教科書以外に学ぶ 2 内　容：1. 例.戦前の新潟の農民の子　2. 小学校を卒業した後に大学の教壇に立つ 3. 例.戦後の大阪生まれの子　4. 高校を卒業した後に大学の教壇に立つ 5. 自分を考え直す　6. 小レポート作成 教科書･指定図書

第6回	テーマ(何を学ぶか)：多様な知3――教科書と教科書以外に学ぶ3 内　容：1. 学内の施設訪問(施設見学だけを目的としない 雨天等の場合は順延) 2. 施設を実見　施設の設計構想　構想を形にする 教科書・指定図書
第7回	テーマ(何を学ぶか)：中間的のまとめ 内　容：1. もう一度――大学というところ　大学生ということ　自分を語るということ 2. 現代に生きる 現代を生き続ける 3. 学生の小レポート紹介 4.例ハンガリーの医師 教科書・指定図書
第8回	テーマ(何を学ぶか)：人類史的な系譜――ヒトと人 内　容：1. ヒト　2. 種と採取と栽培　針と糸 3. 人に生まれる→人となる　4. 人として歩む→人として生きる 教科書・指定図書
第9回	テーマ(何を学ぶか)：人として生きる 内　容：1. 学びの四パタン　2. 学問への切っ掛け　3. 真っ当に生きる　4. 小レポート作成 教科書・指定図書
第10回	テーマ(何を学ぶか)：「3.11」に学ぶ1 内　容：1.「3.11」に学ぶ　2. 破壊の現実に生きる 3. 出来事に学ぶ　経験に学ぶ　人に学ぶ　考え方に学ぶ 教科書・指定図書
第11回	テーマ(何を学ぶか)：「3.11」に学ぶ2 内 容：1. レポートを書くために　2. レポート作成の目論見書の作成 教科書・指定図書
第12回	テーマ(何を学ぶか)：レポート作成の実践1 内 容：文字で表現するということ 文章表現の基礎的な項目 教科書・指定図書
第13回	テーマ(何を学ぶか)：レポート作成の実践2 内　容：意見交換と文章の手直し 教科書・指定図書
第14回	テーマ(何を学ぶか)：レポート作成の実践3(レポート作成の最終段階) 内　容：論理的な展開　主張の明確化　文章全体の再検討 教科書・指定図書
第15回	テーマ(何を学ぶか)：〈学ぶ〉ということ まとめ 内　容：1. 15回の演習を振り返る　2. 要点を確認する　3. 意見の交換 4. 自らの到達点の確認　5. 自らの未達点の確認 教科書・指定図書
試 験	「3.11」について4000字以上のレポート提出(試験なし)